

勝林寺報

母親たちに育てられて

平均年齢を超えたたら自分の「生い立ち」を回顧して記録してみると、とっくに忘れてしまつて

いた人間関係だけでなく、わたしを育んでもくれた社会環境や自然環境などなど、親縁・逆縁を含めて、忘却のかなたから数々の人の姿や町並み、自然の風物などが思い浮かんでまいります。「ああ、こうしたもののなかで、わたしは育まってきたんだ」と今更ながら「いのちの勿体なさ」をしみじみ知らされます。

さしつめ「母親たち」。

わたしにとって「祖母」。遠い播州相生の大好きなお寺（真宗大谷派）からきていました。夫とは早くわかれていましたが、なかなか「権式の高い」人で、髪を結い、火鉢のそばでキセルでタバコなんか吸つて、ときおり若い時に覚えた「ゲッキン」を口三味線風にうたつたりしていた明治風。

最晩年は幼いわたしの手を引いて出征兵士の見送りやご門徒の法要にも連れて行ってくれました。早くから「中風」で寝込んでいてましたが、わたしの三歳年上の姉に「朝顔日記」「富本武蔵」「大菩薩峠」などの新聞連載小説を読ませて気ままな生涯を終えました。昭和二十三年・享年七十七歳。

わたしの産みの母は昭和十年、三十六歳で、父親のから三年おくれて亡くなりました。父亡きあと「女手」ひとつで寺の勤めや庫裡の建築計画などでそれこそ獅子奮迅の毎日でしたから、わたしの三歳下の弟の保育が精一杯で、したがつてわたしは、母から昔話を聞いたり童謡をうたつてもうた記憶は全くありません。しかしその死後、思い出すのは、犬二頭おともに自転車でご門徒まわりに出掛けに行く小柄な母の後ろ姿。それと、毎朝私一人に「お正信偈」（今の行譜）を教えこんだこと。ついでお説教の手ほどきも。しかし

その母の死後、わたしは母の残した蔵書のなかから「日本の古典文学」の端々をいつのまにか教えられていたように思います。母は旧制福知山高女の優等生であつたようで、結婚まえ夜久野小学校にも勤めていたと言います。夫の死後三年ばかりでしたが毎日ご門徒の家々をまわって、だれもが「正信偈」を唱えられるよう献身的に寺ご門徒に尽くしました。

実の母亡き後、福地山荒河から父の弟夫妻が勝林寺に帰り、わたしたちの父母になつてくれました。

この父は、どちらかというと政治家肌。人

一倍お節介やき。区長・他の寺の代務住職。

出石組組長・ご本山の宗会議員など終生そ

んな役付きの生涯でした。したがつて家のこ

と子供のことは母まかせ。そんな義母は、世

に云う「繼母」ということもあって随分気苦

労であったと思います。

近所のおばさんは、わたしが泣いていると、

飛んできて「繼子いじめ」かと疑われること

がしばしばでした。それだけ近所のおばさん

や出入りの人たち、「鉄ツアン」「おまきさん」などの使用人の人たちに「育まれ」てわ

かたでくらしなから「母心」「如来さまの慈悲」を伝えてくれた人と私は思っています。

逆罪を犯したり、如來の法に觸突くものは除外する)

わたしはこの如來様の慈悲のこころを、この母から教えられたように思います。

この母は若いとき九州の「仏教学院」に就

学したとかですが、そうそう學識信仰の深い

人とは思われませんが、それだけに素朴なし

かたでくらしなから「母心」「如來さまの慈悲」を伝えてくれた人と私は思っています。

十月 勝林寺 予定

一日(土) 関川一男宅 お墓参り

一日(土) 専福寺 報恩講

八日(土) 田中重雄宅 三回忌

五日(土) 宮島智里 一七回忌

五日(土) 田村二二男 一七回忌

五日(土) 善立寺 報恩講

一七日(月) 敬老報恩講 打ち合わせ会

一八日(火) 総代ブロック研修会

一九日(水) 坂本克美宅 三回忌

二三日(土) 中嶋矩之宅 三回忌

二三日(土) 長專寺 報恩講

二三日(日) 澤田善男宅 一周忌

二四日(月) 敬老報恩講 舞台準備

二六日(水) みのりを開く会 七時半より

二八日(金) 横山弘三宅 一三回忌

二九日(土) 敬老報恩講

二九日(土) 西宗寺 報恩講

三〇日(日) 衣川正之宅 七回忌

(敬称略)



ことばの泉

「こんにちは」

「さよなら」

「さよなら」

「サイナラ」

忙しい現代では「コンチワ」

「今日は(いいお天気で...)」

「左様ならば(お別れしましょう)」の()を省略した挨拶言葉。だから文字で書くときも「今日は」

と書かなければならない。

万葉時代、山上憶良の歌に「世のなかを憂し

とやさしと思えども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」。「身も細るよう(心細い)」。

以後、「身が瘦せるほど恥ずかしい」。なお

「こちらが恥ずかしくなるくらい優美な

「こころこまやかな」と変化して使われた。

現代、「地球上に優しい」などは「こまやかな

心くばりを」の意味。

オバン・オジン

「オジサン」「オバサン」を指す若者言葉。

でなくとも、ご近所の人には「小父サン」「小母サン」。「叔父・叔母」は父母の弟と妹。父母の兄姉には「伯父・伯母」。これは現代でも間違えてはいけません。



親鸞様が過ごされた

「京都」



『方丈記』の著者「鴨長明」は、1155年（久寿二年）に下賀茂神社の正彌宣の家に生まれ、1216年（建保四年）に没しているから、聖人の前半生の時代の「京都」を、この著書に記述している。

「予、もの心を知れりしより四十余年の春秋を送れる間に、世の不思議を見る事や度々になりぬ」として当時京都を襲った災害・事件、その中での民衆の生きざまを活写している。親鸞様がくらした京都も、そこからおよそ想像できる。

まず「安元の大火」。（親鸞三歳）大火が都の東南から西北へ燃え移り一挙に大極殿・朱雀門など公共施設や貴族の邸宅・民衆の家々、人命のみならず牛馬多数を焼亡した。都で暮らすことの愚かさをしみじみ感じたと長明は言っている。当時これを『大焼亡』と言った

次は『治承の辻風』（一一八〇）。今まで「辻風」が吹き抜けた。当時的人は「地獄の業の風」とも言つた。家や人に數え切れない被害が出た。当時は多く板屋根か茅葺が多かったから突風には一たまりもなかつた。

次は『治承四年水無月の福原遷都』（一一八〇の六月）。平清盛は院政を停止し中央政権を独占。それに対し源氏などの反乱が中央地方各地に起つた。清盛は、天皇・上皇を奉じ急遽福原（神戸）へ都を遷す。勿論公共施設や貴族官僚の人も邸宅もこぼち遷され、京都中、上下ともに大混乱・大荒廃。そのうえ、この年の十一月には福原のみやこを廢して京都に還っている。この政治の恣意な横暴のなか、どれほど民衆は翻弄され塗炭の苦しみを強いられたことか。想像に絶する。

次はこの遷都さわぎの翌年治承五（一一八一）から翌年にかけての全国的大飢饉。（聖人得度の年）。この年清盛も死去している。

「ふたとせが間、世の中飢渴して、あさましきこと待りき」と『方丈記』。

「春・夏の日照り、秋・冬は大風・洪水など、よからぬことどもうち続きて、五穀ことなくしてみようもない。」

「ごとく成らず。」当時の土木・農耕技術では全くしてみようもない。「様々な御祈り始まりて、なべてならぬ法ども行わるれどもさらにそのしるしなし」。神仏への祈願祈祷もなんの効験もない。そこへまた「疫癪」流行。

死者路傍に満つ。「母の命尽きたるを知らずして、いとけなき子の、なお、乳を吸いつつ臥せるなどもあり」

仁和寺の僧。死者の額に「阿」字を書いて弔つた。鴨川のほとりだけでその数、四万二千三百。都全体、全国では其の数量り知れず。

以上は『方丈記』の記事。それ以後の年表

をたどって見ても、平家が壇ノ浦で沈んだ年

（一一八二）にも「昨年今年、京都飢饉」とあり。

ずっと隣てた寛喜二年（一二〇〇）には七月諸国に

震（あられ）降り、八月大暴雨。世界中大飢饉

とある。また、親鸞さまが京都に帰った頃。

寛喜三年には京都市街に「餓死者満つ」とあ

る。またこの前後、「京都に疱瘡流行し死者続

出」。寛元一年七月は「京都大地震」。宝治三年（一二〇九）「京都大火」。親鸞ご自身も八三歳の冬、火災で焼き出されている。

八八歳の文応一年には全国飢饉、疫病流行して死者野に充つ、とある。

このような中、京都の生活は苦しかつた。

越後流罪以後苦難を共にした妻「恵信」や子や孫も共に暮らすことはできず。妻の古里越後へ送り帰さなければならなかつた。

帰京後の親鸞さまの生活は、弟尋有様の援助があつたとは言え、貧苦の底にあつたと言つてよい。

次に京都の「宗教事情」。依然として念佛

弾圧は続いていたし。友人先輩は多くは京都

のなか、どれほど民衆は翻弄され塗炭の苦し

みを強いられたことか。想像に絶する。

聞・思・修



師や先輩のおしえを素直に聞きとること。

これが一番。「学ぶことでもある。次に、その学んだものを、自分の身のうえで（主体的に）思惟・考えてみることだ。

此の「学ぶ」とことと「思う」ととの関係を孔子さまも次のよう教える。

「学んで思ワザレバ即チ因（クラ）シ。思ウテ学バザレバ則チ殆（アヤ）ウシ」（論語）教えを聞いて学んだだけなら無知に同じ。

人の教えを学ばず一人合点は危険だよ。

聞いたことを自分で主体的によく考え自分に問うてみる。それを「学問」と言うんだよ。

次に孔子様は

「習」は、親鳥をみて羽ばたきを習つてゐる小鳥の姿の象形文字。実際自分でやってみるとじめて学問の説（よろこび）もあるというもの。（論語学而第一）

仏教でいう「三學」の「修」も同じこと。

身のうえに行つてみて。それが身についてこそ、生活のうえに実践できこそ。味わえてこそ。

お祖父さんが大病院に、まる一日いていろいろな検査をうけそのデータを頂いて来ました。（検査つかれで二日仕事を休みました、尿検査・血液検査・唾液・啖検査・心電図・胃カメラ・膀胱内視鏡検査・レントゲン・etcなどなど。その丁寧な検査表をみておじいさん「なんのことやらサッパリわからん」。

わたしは昭和二十年冬、復員してすぐ京都市の竜谷大学（文学部真宗学科）へ復帰した。

昭和十七年、予科入学のときには四クラス200人はいたはずの同級生の半は戦争から帰つてこなかつたし、帰つてきても「繰り上げ卒業」などの便法をつかつて消えていた。

真宗学科一年は20人そこそ。

たしかにそのころ、学生生活は楽ではなかつた。外食食堂には「お米のごはん」などなかつた。芋や菜つ葉いりの雑炊がいいとこ。錢湯も毎日行くことは不可能。交通手段も完全には復旧していかつた。

わたしは軍隊生活に鍛えたせいか戦後のドンゾコ生活にもそこそこ耐えられた。

復員してきた同級の仲間は、だれも学問勉強には貪欲であった。古本店で古書を買いつれて勉強した。

「戦争をくぐつてきた仲間」という意識から、先生も生徒も同級生もみんな困窮のなかで連帯感のなかにあつたようと思う。

私の下宿は、京都駅と七条大宮の大学とのちょうど中間にあつたので通勤の先生と同道して教えて頂けた。「早く研究課題を決めなさい」「この本を読め」などと。

いわば日常生活のなかでの指導はありがたかった。だから学校生活といつても、その殆どの時間、教授の研究室や図書館の中でマンツーマンで過ごした。

なかんずく仏教にもこのことがあった。
大歎誕尼世尊の生涯八十年のおしえをそのまま真剣に聞いた直弟子「声聞僧」（しょうもんそう）。

「論議」がうまれ対立対論がはじまる。アビダツマ仏教の時代。四世紀には、ある部派では異宗教と手を組んで自派を保とうとするものまで出てきて。やがて釈迦の地インドから仏教は衰頼していく。

そのようなことがいま日本にあるのか。

師や先輩のおしえを素直に聞きとること。

これが一番。「学ぶことでもある。次に、その学んだものを、自分の身のうえで（主体的に）思惟・考えてみることだ。

此の「学ぶ」とことと「思う」ととの関係を孔子さまも次のよう教える。

「学んで思ワザレバ即チ因（クラ）シ。思ウテ学バザレバ則チ殆（アヤ）ウシ」（論語）教えを聞いて学んだだけなら無知に同じ。

人の教えを学ばず一人合点は危険だよ。

聞いたことを自分で主体的によく考え自分に問うてみる。それを「学問」と言うんだよ。

次に孔子様は

「習」は、親鳥をみて羽ばたきを習つてゐる小鳥の姿の象形文字。実際自分でやってみるとじめて学問の説（よろこび）もあるというもの。（論語学而第一）

仏教でいう「三學」の「修」も同じこと。

身のうえに行つてみて。それが身についてこそ、生活のうえに実践できこそ。味わえてこそ。

お祖父さんが大病院に、まる一日いていろいろな検査をうけそのデータを頂いて来ました。（検査つかれで二日仕事を休みました、尿検査・血液検査・唾液・啖検査・心電図・胃カメラ・膀胱内視鏡検査・レントゲン・etcなどなど。その丁寧な検査表をみておじいさん「なんのことやらサッパリわからん」。

わたしは軍隊生活に鍛えたせいか戦後のドンゾコ生活にもそこそこ耐えられた。

復員してきた同級の仲間は、だれも学問勉強には貪欲であった。古本店で古書を買いつれて勉強した。

「戦争をくぐつてきた仲間」という意識から、先生も生徒も同級生もみんな困窮のなかで連帯感のなかにあつたようと思う。

私の下宿は、京都駅と七条大宮の大学とのちょうど中間にあつたので通勤の先生と同道して教えて頂けた。「早く研究課題を決めなさい」「この本を読め」などと。

いわば日常生活のなかでの指導はありがたかった。だから学校生活といつても、その殆どの時間、教授の研究室や図書館の中でマンツーマンで過ごした。

次に京都の「宗教事情」。依然として念佛

弾圧は続いていたし。友人先輩は多くは京都

のなか、どれほど民衆は翻弄され塗炭の苦し

みを強いられたことか。想像に絶する。

次はこの遷都さわぎの翌年治承五（一一八一）から翌年にかけての全国の大飢饉。（聖人得度の年）。この年清盛も死去している。

（次号に続く）